SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

井川の流通

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 名倉, 香織, 渡邊, 尚貴, 袴田, 恵美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/6327

井川の流通

名倉　香織、渡邊　尚貴、袴田　恵美

はじめに
1 井川の林業
1.1 井川の林業
1.1.1 生業としての林業の位置
1.1.2 戦前までの林業
1.1.3 井川の林業家
1.1.4 木材流通と交通の歴史
1.2 林業の衰退
1.2.1 林業衰退の理由
1.2.2 衰退の影響
1.3 井川林業の動向
1.3.1 新しい山仕事
1.3.2 山のこれから
2 井川の農業と流通
2.1 井川ダムと農業の変化
2.2 畑作の歴史と現状
2.3 農産物の流通
2.4 井川における農業の考察
3 井川の商業
3.1 井川での商業の概要
3.2 栗木商店
3.2.1 栗木商店概要
3.2.2 栗木商店の1週間
3.3 個人商店を取り巻く現状
3.3.1 平野部における個人商店の1週間
3.3.2 栗紀商店との比較
おわりに
参考文献

はじめに

私たちは井川の中の流通、井川からの流通を調査することにした。山に囲まれ、街から離れている井川を、私たちは最初「不便な土地」と捉えていた。どのようにして住民は井川で暮らしているのだろうか。そのような土地に住む人々の生活を支える物資は、どのよ

うに供給されているのだろうか。また、井川から出ていくものにはどんな物があり、どのような経路をたどって外へ出ていくのだろうか。これらのことを知ることで、最初の問いの答えが分かると考えた。その際、現在と過去を対比させ、井川には何が起こってきたのかも考えた。この調査により、井川の在り方を知ると同時に、日本全国の過疎地域のこれからを考える機会となるはずである。(名倉　香織)

1 井川の林業

井川は静岡市葵区最北部にあり、大井川上流の南アルプスの広大な山林を含む地域である。集落は南部に集まり、北部には静岡市森林面積の 40 パーセントを占める林野が広がっている。古くから井川では山林が人々の生活に密接にかかわっていた。特に木材の生産は井川の主要な産業であった。記録では、江戸時代、元禄 5 年 (1692 年)より安政 4 年(1857 年)の間、幕府・尾張家・水戸家等の御用材として伐出したというものがある(井川村誌　森竹 1912)。その他にも奥山は自給的な生活を営むための焼畑耕作地として利用された。

1.1 井川の林業

1.1.1 生業としての林業の位置

井川村誌の林業の項目に「植林ハ本村唯一ノ村是ニシテ村民ノ最モ意ヲ傾注スベキ重要ナル事業ナリ」とある。ヒノキ 20 万本、スギ 20 万本の計 40 万本を植林する計画もあったようだ。村誌によると林産物の内訳は丸材および角材　175,000 円、シイタケ 1,668 円、獣皮 453 円であった。当時から林業副産物としてシイタケの栽培もあったという。

井川の地場産業である林業だが、今では人口の減少、林業家・森林組合員の高齢化、後継者不足、山林所有者の山離れが問題となっている。

図 1 は昭和 38 年(1963 年)から平成 22 年(2010 年)までの、井川における木材生産量のグラフである。

図 1　井川における木材生産量　(井川森林組合事業報告書調べ)

昭和 47 年(1972 年)をピークに徐々に生産量が減っている。木材生産には、ある範囲の森林を全て伐採する主伐と、良材を生産する過程で、適度な間隔を作る目的で行う間伐がある。井川森林組合によると、実績が 1000 立方メートルを超える時期では生産量の主体は主伐によるものだが、平成 19 年(2007 年)、20 年(2008 年)と生産量が 0 になった後は、間伐材が主体となっている。

林業だけでなく、多様な産業が井川を支えてきたのは言うまでもない。焼畑は、日本の山村では多く行われてきた。井川にも焼畑の文化があった。焼畑は、林業と密接に関係している。以前林業を営んでいらした長島一裕氏(昭和 7 年(1932 年)生まれ)によると、元々山は木材になるスギやヒノキばかりではない。モミ、クリ、ナラのような雑木が生えている。そのような木々を切り、焼いて肥料とし、その土地で焼畑を行う。そして 3 年ほど、シイタケや、ヒエ・アワ・ソバ・マメのような農作物を作り、その後その場所にスギやヒノキの苗木を植樹する。そして、私たちの知るところの「林業」を始める。焼畑は、山の木を林業に適した種に移行させる手段で、それゆえ林業と密接に関わっていた。

本節では、さまざまな産業を繋ぐ中心の役割を果たしてきた林業について記述する。

1.1.2 戦前までの林業

近世においては、木材の伐採はもっぱら年貢代納のために行われた。

明治になり、奥山の帰属が問題になった。近世以来、地元農民は奥山で焼畑を行い、奥山を生活基盤として利用してきたが、明治 13 年(1880 年)、改正反別取調帳により実際の焼畑地以外が村持山と認定されるまで、官民有未定地であった(滝波 2004)。その後村持山は経済変動の中で村外へ流出。明治 28 年(1895 年)には中・北部 1.2 万ヘクタールが東海パルプ(現特殊東海製紙)に、大正 8～9 年(1919～1920 年)には中・南部 0.4 ヘクタールが加藤商事の会社の社有林とされ、両社により大規模に植林・伐採などが行われた。また、個人所有の山林も多く、個人の林業家も多く存在した。

1.1.3 井川の林業家

昭和 7 年(1932 年)生まれの長島一裕氏は、湛水地区に山を持ち、焼き畑でのヒエやアワ、マメ、ソバなどの栽培も行う複合的な林業家であった。今でも家の近くの畑でお茶や野菜を育てている。昭和 27 年(1952 年)から井川森林組合に勤めていた長島氏は、木材の切り出しから、運搬までこなしていた。切り出された木材はワイヤーで運ばれ、トラックに積まれ、陸路で田代から静岡の製材所まで運ばれていた。トラックは 1 日に 2 台も出ていたという。トラックは材積 22～23 石で、1 石＝3.6 立方メートルであるので、当時は 80 立方メートルが 1 日で運ばれていた。相当な量の木材が井川から出ていたことになる。また、長島さんは貨車積みの経験もある。大井川鉄道の堂平から島田までの木材運搬も行われていた。そして大井川に落とす川狩りもあった。

長島氏は、現在は年金が主収入である。長島氏の山のスギやヒノキはある程度まで育っているため、今は手入れがほとんど必要なく、最近は山にはあまり入っていないそうだ。しかし、長島氏の家の天井の立派な梁は、長島氏が育てた木を使っている。それだけでなく、静岡市葵区松富にお住まいの息子さんの家にも長島氏の木が使われているのだそうだ。林業が長島さんの生活に根付いていたことを感じた。また、山仕事の際の道具も見せていただいた。鉈の柄や、刃を納める鞘には長島氏の山の木が使われていた。また、道具に付けられている腰紐も手作りされていた。どれも売り物以上に丁寧に作られ、とても個人が作ったものとは思えなかった。長島氏の林業家としてのレベルの高さを感じた。

1.1.4 木材流通と交通の歴史

井川ダム建設の際に井川に道路ができる前は、人々の移動はもちろん徒歩であった。大日峠は静岡へ通じる唯一の通路で、食糧など物資は全てここを通っていた。井川本村から、吊り橋である前川橋を渡り、小河内部落、大日峠の県道を通るルートで、人々は静岡と井川を行き来していた。吊り橋は明治 16 年(1883 年)に架けられた。井川～静岡の県道で唯一の吊り橋で、人々にとって大井川に架かるこの吊り橋は井川のシンボル的存在であった。栗山愛子氏(昭和 8 年(1933 年)生れ)によれば、このような山道のルートを歩きでいくと、朝の 4 時頃井川を出発して、夕方頃にやっと静岡についたという。

写真 1　大日峠を越える人

出典：『井川ダムの記録』

写真 2　吊り橋　前川橋

出典：『井川ダムの記録』

現在、井川には道路や鉄道がある。この道路や鉄道は、井川の特徴であるダムを造る際、資材や人を運ぶためにつくられた。また大日道路、つまり井川林道(昭和 33 年(1958 年)完成)はダム建設の補償としての一面も持つ。昭和 32 年(1957 年)のダム完成までは村外との車両交通はなかったという。この道路ができたことで井川では伐採した木材を、トラクターを使い陸送できるようになった。

それまでは、山から山に張られた太いワイヤーにつるして運ぶ、資材運搬専用のロープーウェイ、索道を用いていた時代もあった。索道は昭和 11 年(1936 年)に森林組合によって架設された。索道はそれまで人力で村に運ばれた食糧などの物資も運んだ。

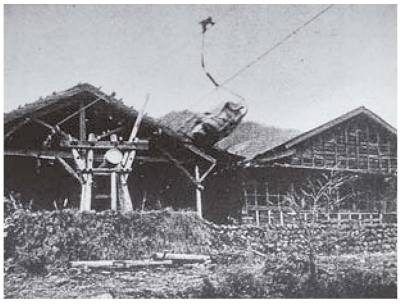

写真 3　索道　井川駅

出典：『井川ダムの記録』

またそれ以前では、「川狩り」といって、大井川の水流を利用して、下流まで木材を運ぶ時代もあった。川狩りは、ダム造営の前まで行われていた木材の輸送手段である。川狩りをしていた長島久雄氏(昭和 3 年(1927 年)生まれ)によると、川狩りは井川よりも更に山奥で切った木材を、大井川の流れに乗せて下流の島田まで運んだという。夏に木を伐採し、2～3ヶ月の間乾燥させ、軽くする。9 月下旬から、軽くなった木を川の水流に乗せて運び始め、正月までかかったという。

写真 4　川狩りの様子(1)

出典：『井川ダムの記録』

写真 5　川狩りの様子(2)

出典：『井川ダムの記録』

川狩りでは、自分は丸太の上に乗り、道具は竹の先についた「かぎ」を用い、岩などに引っ掛かった木材を引っ張り、軌道に乗せる。水量の足りない地点では川をせき止めたりもした。川狩りの仕事に当たったものはだいたい富山などから来た日雇い労働者だったようで、「日雇(ひよう)さん」と呼ばれていた。雇い主は東海パルプ製紙のような林業の大会社で、大井川では 3 社が川狩りを行っていた。焼印を木材に打ち、それによって木材を区別した。大井川の下流の島田で木材の陸揚げをした。東海パルプによる川狩りは 1972 年(昭和 43 年)に終了となった。

輸送手段が違えば、荷物の到着地点も異なる。現在の陸送では、木材は藤枝の岡部町の流通センターへ運ばれる。

しかしながら、井川の林業は衰退してしまった。交通の発展によって、陸送ができるようになったのに、どうしてなのだろうか。

1.2 林業の衰退

1.2.1 林業衰退の理由

かつて産業として井川を栄えさせていた林業であるが、現状では、東海パルプなどの社有林内を除いて用材目的に伐採される木はほとんど無いようだ。井川森林組合の平成 23 年(2011 年)の通常総会議案によると、平成 21 年度は間伐量が 215 立方メートルに対し、主伐量は 0 立方メートルである。間伐材の利用はあるとしても、主伐量がないということは、森林をそのままの状態でキープしているという状態と考えられる。

静岡県全体から見て、県の林業専業労働者数が昭和 45 年(1970 年)には 4,917 人だったのに対して、昭和 55 年(1980 年)には 2,775 人にまで減少し、平成 2 年(1990 年)では 1,515 人、平成 17 年(2005 年)では 627 人まで落ち込んでいる。山離れや後継者不足が伺える。

井川の林業の最盛期はダム建設前後であるが、ダム建設に伴い、重機や資材を運搬するための鉄道ができ、道路ができ、交通網が発達した。井川はダム景気と呼ばれる景気に見舞われた。当時井川はダム建設でやってきた労働者を迎え入れ、どこも盛況だった。女性

も「背負子」として、誰もが皆働いていたのだという。井川は活気あふれる村だった。

しかし、ダム建設が終わり、労働者が井川から引くと、街と繋がった道路によって、人口の流出は加速した。交通が発達して木材の輸送も楽になったかと思えば、相反して、林業自体が衰退し、運び出される木材も減少してしまった。

それには日本の高度経済成長が大きく関係している。高度経済成長期、産業構造が大きく変化し、日本の人口は都市部に集まった。都市部には大量の建築資材の需要があり、政府は木材の輸入を解禁した。この時は、木材需要のピークであったため国産材も多く使われていたが、しだいに外国から流入する木材に、国産材は押されていった。林野庁の木材需給表によると、昭和 30 年(1955 年)には 90 パーセント以上あった用材自給率が、昭和 40～60 年にかけて大きく 30 パーセント台まで低下した。ここ 10 年では 20%のあたりを推移している。(田中　2007:111)

林業の大きな仕事には、地拵え、新植(植林)、下刈、枝打、間伐、主伐などがあり、新植から主伐まで 40～45 年という歳月をかけて育てられる。たくさんの手間暇をかけているのだ。それなのに、木を切り出しても山主に利益が全くと言っていいほど入らない。手間暇かけた木を切り出しても赤字になってしまうというのが現状である。それゆえ、山主は木を切らず、山は放置されるようになってしまった。

驚くべきことに、搬出コストがかかりすぎることが、日本材が外材価格に太刀打ちできない理由であるという。外国から木材を運搬する方がはるかに長距離を移動させているのに、日本国内での輸送費の方が高くついてしまうのだ。それは、外国材は徹底したコスト管理がなされ、流通・加工の段階でコストが抑えられているためである。それゆえ外材は充分に利益を生み出す。国産材は輸送費が高くついてしまうため、利益が山主に還元されないのだ。(田中　2007)

日本の山林には、スギやヒノキのような使用用材が大量植樹されているにもかかわらず、現在日本ではほとんど木が切られていない。井川の林業も例外でなく、日本林業の衰退の渦に巻き込まれてしまった。

1.2.2 衰退の影響

井川中学校にお邪魔した際、山主を祖父に持つある生徒と話をした。彼は「うちは今、『苦水』を飲んでいるんですよ」と言った。その言葉は祖父から聞いたのだそうで、日本の木材の需要がピークに達した時、彼の祖父はお茶で儲けた金で、山を買った。もちろん山でさらに儲けるためである。

山主と言えば、「お金持ち」の代名詞であった。1 ヘクタール(100 メートル×100 メートル)の木を伐採すると、一家族が 1 年食べていけた時代があった。その頃は「山さえあれば銀行はお金を貸してくれた」のだそうだ。それほどにまで山主は潤っていた。それは井川全体にも言えることであり、林業が盛んに行われていた頃の井川はとても豊かだったと想像できる。しかし、林業が行われなくなると、山の価値は瞬く間に低下してしまった。そ

れは山が木材生産の場という前提で価値があったためである。林業がおこなわれなくなった現在では、山は見向きもされなくなってしまった。彼は祖父から「お茶で儲けたお金を山につぎ込まなければ今頃、うちはもっと豊かだった」とも、聞いていたそうだ。

井川で林業がおこなわれなくなると、お金になる井川の仕事の中心が無くなってしまった。仕事を求め若い世代は街に出て、井川は過疎化・少子高齢化が進んだ。ダム建設前には 200 人もいた小中学生が、現在井川には 11 人しかいない。(本報告書 5 章参照)これは井川には次世代を担う存在がほとんどいないことを意味する。これは林業衰退が井川に与えた大きな影響である。

また高齢化により、放置される山林がかなり増えてきているという。高齢化によって山の手入れができなくなる。また、山の手入れをしていた人の死によって、山はその人の子どもに相続されるが、境界の印が見分けられなくなり、どこからどこまでが自分の山かわからないという事態がよく起こっている。そうするともう、手入れができない。そのような事態はもちろん、山の価値が低下し、山に対する関心が減ってきたということとも深く関係している。

木材価格の低迷により、山林が放置され、すると木材の質が落ち、さらに価格が下がるという負のスパイラルが起きているのだ。

1.3 林業の動向

1.3.1 新しい山仕事

現在井川では、林業は木材需要最盛期に比べてほとんど行われていないとはいえ、今でもやはり森林組合の存在は大きい。森林組合と長島建設の２つが、井川での雇用創出において大きな役目を果たしている。

井川の森林組合は特殊である。通常、森林組合が行う間伐・伐採・製材のような森林整備の仕事の他に、独自の仕事を持つ。それが、渡船事業と骨材生産事業、ダムでの流木処理事業である。渡船はもともと、ダムができた際、住居のある本村の対岸に自分の山を持つ人が山仕事に出る際、無料で船を出したのが始まりである。現在渡船は観光利用にも使われている。骨材とは、建築資材としてコンクリートなどに混ぜて使われる砂や砂利のことで、これを生産することも行っている。このように森林組合は井川で多くの仕事を任され、重要な役割を果たしている。

現在、森林組合が林業に関して最も力を入れて取り組んでいることが、農林水産省や静岡県が推奨する施業の集約化である。これは山仕事の効率化、コストダウンを目指した取り組みで、なるべく多くの利益を山主に戻すことを目標にしている。

たとえばA、B、C の 3 人によって所有された山があるとする。今、A 氏が森林組合に A 氏所有の土地の間伐を依頼したとする。その山は、井川本村から、車で 2 時間のところにある。また、A 氏の土地は山の頂上にあり、ふもとまでは車で行けても、A 氏の土地までは徒歩で向かう必要がある。更に 1 時間を費やし A 氏の土地まで来て、間伐をして、また徒

歩で車まで戻り、車で 2 時間かけて事務所まで戻る。間伐が 1 日で終わらなければ、何日もこれを繰り返す。そして次の年、B 氏から間伐の依頼が入れば、同様のことを繰り返す。これは珍しい事例ではないという。

それをいかに効率化するかが、集約化施業だ。A 氏から間伐の依頼が入った際、B 氏・C 氏にも間伐の提案をする。了解が取れれば、3 つの仕事が 1 回にまとまりコストダウンが可能となる。また、3 人の山主に、道路をつける提案もする。それにより、山の上まで車やトラックが入れるようになり、移動時間短縮、間伐材利用も可能になる。切り捨て間伐が多い中、間伐材の有効利用で、山を最大限有効活用できる。このような企画をすることも、今の森林組合の仕事である。外材に対抗できるよう仕事の効率化・コストダウンを図る現在の日本に必要な事業だと感じた。

しかし、先に述べたように、山の相続の際、自分の山がどこからどこまでかわからないという事態も珍しくなく、手を入れられない山林がかなり増えてきている。すると、この集約化施業ができない。集約化施業の困難さはここにある。森林組合はそのため、補助事業として、山林所有の境界の明確化を行っている。この先、集約化施業が進められるかどうかで、山林の価値は大きく変わってくるだろう。そして木材を最大限高く売るための努力として、井川で木材を加工、製品化してしまえる環境を整備する計画も考えられている。

良い材を作り、コスト管理を行うことは、井川の森林を利用できるかできないかを左右する。森林組合の取り組みは、井川の将来にとって鍵となるだろう。

1.3.2 山のこれから

井川の人々の暮らしと林業は、やはり深く関係していた。かつて山林は現金収入を得るための木材生産の場所であり、また、山林は雇用創出の役割も果たしていた。林業が衰退した現在では、ダムによってできた道路は人口の流出に拍車をかけ、井川存続は難しいとされている。

そのような苦しい状況ではあるが、井川では森林組合をはじめとして、林業を再興させようという働きも見られた。森林を利用できるかできないかで井川の将来が大きく変わってくる可能性があると感じた。

また現在でも人々が生活を営み、多くの人の故郷であるこの土地には、歴史があり、伝承があり、思い出があり、沢山の人が失いたくないという気持ちを持っている。衰退してきた林業という視点から井川を捉えたが、山林という資源がある限り、まだまだ井川の林業は終わらないと思う。これからの工夫と努力次第で、井川林業から、井川を存続させることは可能なのではないかと考える。(名倉　香織)

2 井川の農業と流通

井川には、2 種類の農業生産があった。そこで生活する人が食べるものとしてヒエやアワ

など自給用の作物の生産と、売り物として、遠くに運ぶことに適した日持ちのする作物の生産である。

本節では、井川と他の場所のあいだを流通する存在として、主に後者について考えたいと思う。たとえばそれは今なお井川に存在し続ける茶やワサビやシイタケや加工品であった。しかし近年、それらが減少傾向にある一方で、数多くの野菜が作られている。このような変化はなぜ起こったのだろうか。そして、それらの作物の流通の手段はどのように変わったのだろうか。それらを探ることで井川の農業と流通の関係を見ることが本節の目的である。

2.1 井川ダムと農業の変化

現在の井川の農業を外部との流通に関連してみる際に西山平における農業は欠かせない。なぜならば西山平における農地は本村よりも規模が大きく、また本村に茶畑が多くみられるのに対して西山平では畑地での生産物が数多く見ることができるためである。こうした畑が西山平に作られたのは昭和 28 年(1953 年)のダム建設に伴う水田の整備がきっかけであった。それ以前において井川農業は雑穀や茶畑を中心としていた。だがダム建設を境にして、西山平の土地を湖の中に沈む土地にかわる保証地として水田に整備したのである。山地であるがために本来であれば水田を一から作るというのは厳しいものがあったが、ここではダム保障という形で大規模に進めることが出来た。水田が作られた理由としては、戦時中の配給と戦後の食糧の不足をきっかけとして米の需要が高まっていたことが考えられる。こうした例は日本各地に見ることができる。「全面的に米に頼らぬ生活を送っていた地域では配給制による思わぬ逆転現象症が生じることとなった」(古家 2009:59)。井川でもそうした反応が見られた。ダム建設を境として、外部の力で井川に水田を作ったことは井川農業に新たな流れを生み出すものであった。

しかしながら、そうして作られた水田は最初の数年間は収穫量も安定しなかったという。特に 3 年目には冷夏ということもあり、収穫がほとんどなかった。だがその対策として、東北地方で生産するような冷夏に強い米をさらに改良することで、それ以降の収穫量・品質が徐々にだが安定するようになった。それは自家消費レベルを超えることはついになかったという。しかし、自家消費のレベルとはいえ、主食を自給できるようになったことは、井川の農業にとって重要なことであったと考えられる。

2.2 畑作の歴史と現状

西山平の水田は現在では一世帯のみが維持しているが、それ以外は畑地に転換した。その理由としては昭和 45 年以降の減反政策がある。その一方、水田を転換した畑で作られた野菜は自家消費や新たに得た流通経路に乗った販売で生産量を増やしていった。

畑で作るものには数多くのバリュエーションがあり、それぞれの農家では年に数多くの作物を作るが、出荷に回すのはその一部に限られている。

例えば、A 氏(80 代前半 男性)は、図 1 のように 4 月から 10 月にかけて植え付けをおこない、

ほぼ年間を通して何らかの作物を育てている。

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
			ホウレンソウ・キャベツ・コマツナ・ネギ	トウモロコシ・キュウリ・ジャガイモ・サトイモケ	トウモロコシ・トマト・ナス	ダイズ・アズキ	ダイコン・ハクサイ	チンゲンサイ	ニンニク・タマネギ		

（網掛けは出荷が見込まれる野菜）

図2　Aさんの家で作っている野菜と作付けを行う月

上の図のうち、たとえばトウモロコシやダイコンやトマトは出荷が見込まれているという。一方で、アズキやダイズなどは自家消費を目的としている。井川での現在の農業は、売るものと自家消費するものが両立している。ではなぜそれらが両立するようになったのだろうか。変化の理由としては、山の管理に関連して従来の特産物の収穫量減少が考えられる。その一方で、新たな耕地という観点にも注目したい。自給用のコメを作っていた水田を畑に変えたことで、ある程度の自給用の野菜が作れるようになった。そして朝市会のような売り場を得たことや道の整備で野菜の持ち出しが可能になったことを背景に、畑での生産物が売り物となり得たようである。

現在、トウモロコシが多くの農家で夏季に作られており、井川というブランドとして注目されている。ここでは井川には作られてきている評判に注目する。井川のトウモロコシは高地で作るため、甘みが多く好評であるという。井川のトウモロコシをブランドにするための農家の努力も見ることができる。井川という高地において高品質なトウモロコシを作るには、肥料の工夫が必要とおっしゃる方もいた。自家用と異なり、品質を保つことは売り物として必須条件である。一回評判が崩れると命取りになりかねない。それを実証するような出来事の一つに、ワサビの苗が売れなくなったという事件がある。井川では数年前までワサビの苗も特産物として販売していた。ある年に質の悪いワサビの苗を出荷してしまい、それ以降にその注文は減少したというのである。

2.3 農産物の流通

もともと農産物の流通ルートとして存在していたのは、徒歩による輸送手段であった。

道が整備されたのはダム建設に伴う資材や人材搬入がきっかけである。したがって外に持ち出すことのできるものとしては、自動車道の整備がなされる以前には、軽くて日持ちするものが中心であった。それは茶やワサビ、シイタケといったものである。これらは道が整備されて以降も、井川の産物として収入源であり続けた。

井川の農業就業者が参加する組織としてよろず市会が昭和48年(1973年)に結成されている。これは昭和45年(1970年)から見られる小さな出店がきっかけであったという。それがさらに拡大していく上で昭和52年(1977年)に朝市会という名称へと変わっていったのである。主な売り場所としては井川地区内に加えて、大日峠や静岡の各地への出張販売もあったという。そのころには朝市会という存在自体が物珍しかったためか、井川のそれも注目を浴びていたようである。朝市会のメンバーもよその地域を参考にどのように朝市を出せば商品が売れるのか、また売れ筋の商品はどのようなものがあるのかといった研究も行っていた。

朝市会で売られていた物の中心には、もともと井川の特産品であった茶やシイタケ、ワサビなどがある。農協を経由するかつてのルートから朝市会における小規模販売の形式になった背景に、それらの生産量が減少したためであると指摘されている。(筑波大学教育修士地理学野外実験報告書作成委員会　1995:74)その一方で朝市会に細々と出荷していた野菜が売れるようになり、ある程度は売れるのだと考えられるようになった。

しかしながら販売ルートができても、野菜作りの面積は余り拡大しなかった。一つの理由はダム建設に伴う水田開発で分配された土地をさらに拡大するのは難しかったことである。また、そもそも山に囲まれた井川では新たに畑地を作ることが難しかった。そのうえで他地域に比べて輸送費や交通費のハンディがあり、野菜の販売に特化することもリスクがあった。

朝市会は現在その規模を縮小している。まずメンバー自体が減少している。当初は30人ほどいたメンバーも現在では5・6人ほどになってしまっているという。その背景には就農人口の高齢化が挙げられる。朝市会をはじめたころは、そのような取り組み自体が珍しく、注目されたが、現在では生産者による直販は珍しくはなくなった。出店者の高齢化とあいまって徐々に縮小しつつある。

朝市会の縮小がする一方で新しい販売形式も生まれている。注文販売や無人販売である。まず注文販売であるが、これは主に郵便局の取り次ぎや、電話で注文するなじみ客への販売であるという。現在、井川のトウモロコシがブランド化されていることは述べた。その販売方法は平成2年(1990年)ごろからはじまる注文販売が中心であるという。しかしトウモロコシもここ数年は高齢化に伴って収穫量が減少している。また無人市に関しては、実際に品物が置いてある時期に行かなかったため定かではないが、その販売小屋の規模から考えるにかなり小規模である。数年前に人目に付くところに移したといい、観光客が井川に来た際井川の物を買う一つの方法であるものの、その性質のために拡大はたやすくない。

また新たな流通方法の一つとしては、JA主体の自慢市という取り組みがある。少量の生

産物でもJAを経由して外部で売るというものである。本来であれば農協に出荷する野菜の量はある程度まとまっていなくてはならない。その代償手段として朝市会があった。(筑波大学教育修士地理学野外実験報告書作成委員会　1995:74)しかし、朝市会の縮小と平行して平成18年(2006年)から静岡市葵区にある北部自慢市への参加がはじまった。少量でもJAを通した出荷が行えるようになったことは井川のような小規模農家にとって重要なことである。

2.4 井川における農業の考察

現在の西山平にみられる野菜作りは水田整備をきっかけにして発達してきた。一方で水田が畑に変わった背景には日本の減反政策がある。井川内外の人々から井川は陸の孤島と呼ばれたことがあるが、一方ではこのように、日本全体との時代に連動している姿がある。井川は決して独立して存在しているのではない。井川農業で問題に挙げられるような高齢化と後継者に関する問題もやはり、日本全国で見られる問題である。

一方で、井川独自の事情もある。農地拡大が難しいために、限られた土地で、自給用作物と販売用作物を並行して作っているのである。このような形では農業だけで生計を立てていくことは難しいとB氏(70代後半 女性)はおっしゃっていた。

井川の農業は消失ないしは縮小の危機にある。この農業を維持していく手段として考えられることは高地性を生かしたブランドを守ることである。井川のような高地であることは、生産拡大の難しさや輸送費などの難点を抱える一方で、昼夜の寒暖の差を生かした品質の良さにもつながるのである。高地性を生かしたブランドとしてはすでにトウモロコシや茶がある。それらの評判を生かすことで、他の野菜もブランド化する道はないだろうか。井川ならではの魅力を生かし、またそのブランドを守っていくことが農業就業者の高齢化を食い止め、井川農業の消失を食い止める方法ではないかと考える。(渡邊 尚貴)

3 井川の商業

本章では井川と外部をつなぐ「流通」に焦点をあててきたが、現在井川に暮らす全ての人にとって重要な「流通」は、日々の食料や日用品の流通である。本節ではその食料や日用品の流通に注目する。なかでも井川で重要な役割を担っている個人商店、青果店に着目し、平野部の青果店との役割の違いについて考えたい。そのために井川の青果店に1週間のうちの4日間、参与観察をさせてもらうことにした。

3.1 井川での商業の概要

本項では『井川の歴史と暮らし』(筑波大学　1995:58-67)を参照しながら商業の概要について述べる。

ダムが建設される前の井川は、静岡中心部との物資の交流は主に便利屋と呼ばれる人々の手によって行われていた。彼らは静岡中心部から生活物資を井川地区に運び込み、井川地区の産物を買い付け静岡へ出す運搬業を営んでいた。今回参与観察させていただいた栗

紀商店も、今の店主の祖父がリヤカーに井川の産物であるワサビやシイタケ、ナメコといったものを乗せ、一日がかりで持って行ってそれらを売った金で海の魚を買い付けたり物々交換をしたりしていたようだ。ダムの建設に伴い道が整備されることによって 1950 年代に「商店」という形に移行したという。井川に現存する商店では他に KS 運送も便利屋を営み、NA 酒店は大正期より運送業に携わった過去をもつ。NA 商店のように人を雇って塩、米、酒、呉服、日用雑貨など運ばせて店頭販売をする店舗もあった。前述した通りそのころの交通事情はあまりよくなかったが、それゆえに便利屋が発達し、これが重要な商業的機能を果たしていたといえる。

昭和 32 年(1957 年)から始まるダム建設工事前の商業従事者は 104 名であったが、工事開始と共に大幅に増加した。昭和 34 年(1960 年)には 215 名となっている。これは工事関係者の流入による井川地区そのものの人口増加と関係していて、ダム建設期の井川の商業は、ダム工事関係者の需要を中心に最盛期を迎え、かつてない発展を遂げた。ダムが完成した後も、ダム工事関係者は重要な顧客であり続けた。

しかしダムが完成して後、商業は衰退していくこととなる。1990 年代の時点でも工事関係者への店舗の依存は相当深かったらしく、彼らへの商品配達が 70 パーセントに達している店舗もあった。特にこのころは平成 2 年(1990 年)に着手された赤川ダム建設の影響が売り上げに残っていた時代でもある。日本の有数の建設会社が集まってそれぞれが労働者を雇っていたのだから、それこそ品物はあればあっただけ売れたらしく「井川にとってのバブル」とも称されていた。それでも 1995 年ごろには電源開発に関する工事ばかりになり、それも完了までの残りわずかな時間でしかなかった。それから今に至るまで、井川の経済は衰退している。

次に井川の商業中心地の分布の話を概説する。井川は本村と田代、西山平の三つの大きな集落から成り立っている。だが本村の抱える商店が井川全体に占める割合は非常に大きい。

なお商店の数は全体的に減り続けている。平成 6 年(1994 年)の時点での井川全体の商店数は合わせて 48 軒であったが、平成 23 年(2011 年)7 月現在は合わせて 36 軒で、そのうち本村には 27 軒が存在している。飲料食品小売店は現在、本村にしか存在しない。なお栗木商店は飲料食品小売店に該当する。物流の拠点は本村で、本村の人は「あっち(西山平)は農業、こっち(本村)は経済地区」というのを何度か耳にした。なお本村の商圏は、田代、西山平の商業機能が不十分であるため、両集落と小河内にまで及んでいる。3 年ほど前から栗紀商店と魚貞商店は電話による配達も受け付けるようになった。この 2 軒は商品の内容などで意識して住み分けはしていたと説明を受けたものの、並べられている商品のラインナップはあまりかぶっていない。だが住民はある程度意識して両方利用している。

このような個人商店を利用する他に、静岡市街地まで行った際に専門店や大型店で買いだめする人、おうち coop という週 1 のサービスを利用する者もいる。おうち coop は 1800 種類の商品の中から選べるので便利といえば便利と考える人も多いだろう。

3.2 栗紀商店

3.2.1　栗紀商店概要

栗紀商店は今の店主の祖父の時代から商っている青果店だ。もともと祖父は前述の便利屋を営んでおり、1960 年代のダム建設前後に労働者が流れ込んで需要が拡大して商いが大きくなり、店舗を構え今の形になった。妻が嫁いできたのは 1980 年のことである。今は井川の八百屋として認識されている。

写真 1　栗木商店外観

日常生活を営む上で必要な食品はおよそ入手可能となっている。なお井川滞在中に店に並べられていた青果は以下の通りだ。

ホウレンソウ、キュウリ、コマツナ、ピーマン、ブロッコリー、トマト、アメリカンチェリー、ビワ、カブラ、ミニトマト、ゴールデンキウイ、カイワレダイコン、レタス、ナス、キャベツ、ハクサイ、ダイコン、メークイン、シンジャガイモ、マイタケ、ブナシメジ、バナナ、シロネギ、レンコン、ハクトウ、小玉スイカ、スイカ、種イモと化したメークイン(買っていく人がいたら売っている)、ミズナ、リンゴ、グレープフルーツ、ゴボウ、カボチャ、タマネギ、ミネオラオレンジ、サンフルーツ、ブドウ、アマナツ、バナナ(シュガースポット入り)、スナップエンドウ、キンカン、ニンジン、カンショ、ショウガ、ニンニク、細ネギ、モヤシ

細ネギとモヤシは足が速いので、店頭に並べられてはおらず、お客から要望があった場合に倉庫から取り出していた。

夫婦で月曜日から土曜日まで、だいたい朝の 9 時から夕方の 6 時までの営業だ。忙しいときは人出を借りるが、基本はご夫婦の 2 人で営んでいる。店内には野菜は勿論のこと、新鮮な海の魚・生活雑貨・バターに牛乳・冷凍食品その他もろもろが置かれており、まさに「八百屋」の様相を呈している。

3.2.2　栗紀商店の1週間

6月13日から16日までの4日間、栗紀商店で参与観察をさせていただいた。それに聞き取りを加えて栗紀商店の1週間を再現する。平均客数は1日25名前後であった。また1回の精算金額は買いだめしていく方も多いのか5,000円を越えることもある。

毎朝8時頃にシャッターを開ける。店主とその妻がシャッター内に収まっていた日持ちする野菜や、店の向かいの冷蔵庫に保管しておいた魚などの生鮮食品を持ってきて手際よく見栄え良く並べていく。月曜、木曜では店主は静岡の中央市場に行って帰ってきてから作業に加わる。荷降ろしの際は、通行の邪魔にならないよう道の向こう側にトラックが止められ、荷台からあれよあれよと言う間に一人が荷を下ろし、もう一人がそれ受けとって積み上げていく。その山を台車に乗せ店の軒先まで運んでは中身ごと陳列したり、または足が速いものなら冷蔵庫、または同じ道沿いにある観水荘という旅館の隣の冷凍庫に持っていく。「スーパーと違い、そう冷房も効いていないから、すぐに腐る」と奥さんは言う。仕入れたばかりで品数が豊かな月曜や木曜は客足も伸びるそうだ。

それが終わるか終らないかのうちにキュウリやナスといった野菜を決まった数ずつ袋に入れて並べていく。並べながらも来店する客の相手をする。基本的に店番と電話番が妻の役割で、仕入れや配達、料理の仕込みが夫の仕事だ。配達先は個人宅、給食センター、福祉センター、井川少年の家などだ。仕込みは店内の調理場で行う。

近場にコンビニなどが存在しないので、仕出し弁当の注文も受ける。そうなると頼まれた時間や数にもよるが、前日にも仕込みをして当日は早ければ3時から作ることになる。

また火曜と金曜には、電話で頼まれて置いたものを本村以外の集落まで送り届けるサービスを行っている。この個人への宅配サービスは3年ほど前から行われており、多いときには20軒をまわることもあるそうだ。

3.3 個人商店を取り巻く現状

3.3.1 平野部における個人商店の1週間

本項では栗紀商店の役割を考えるために、平野部の個人商店である石善ストアの1週間と比較することにする。浜松市東区笠井新田町は世帯数が982、人口は2849人だ（8月1日現在）。笠井地区と呼ばれるここは、かつては織物で栄えたものの国鉄の線路が敷設されることを拒んでかつての栄華を失ったと言われる街だ。石善ストアの開店時間は朝の9時ごろから夜の8時ごろまで。節電のためという建前で最近7時くらいに終了している。店主は仕入れ、競りの参加、配達、卸を担当する。店主の妻は一日店番をする。基本は上記の栗紀商店の夫妻と変わらない。

井川で調査していた6月13日から18日にかけて頼んで来客数をカウントしてもらったところ、1日当たり4人から12人で1日の平均は7人だった。客層はお菓子を買いに来る小学校低学年か、榊や香花、または日常で少し足りなくなった食材や物品を求めてやってくる60以上の方がほとんどを占めている。1日の平均売上は3,756円ほど、一回の平均精

算額は524円ほどだ。

売れた商品をリストアップするとこうなる。

惣菜、醤油、コーヒー、野菜、お菓子、香花、豆腐、ミツバ、ソース、クリープ、砂糖、トマト、レタス、洗剤、牛乳、ネギ、アイス、リンゴ、鮭、オレンジ、卵、油、食パン、香典袋。

売れていったものだけを表記しているので情報量は少ないが、野菜以外の品物は栗紀商店に比べると品ぞろえは薄めであった。

3.3.2 栗紀商店との比較

栗紀商店と石善ストアの違いはその立地条件と客の数にある。石善ストアの町内には大型スーパーが1軒、中型のスーパーも1軒ある。例え同じ区域内に2800人以上の人が住んでいたとしても、1日に来る客の数はその40分の1程度である。買われていく品物にしてもそれだけで日常を生きられるという内容ではない。個人客ではなく卸で生計を立てている店だ。対して栗紀商店は井川の商業地帯にある静岡市街と井川とを結ぶ流通の拠点であり、約500人の井川で1日30人近くに利用される。大型店が身近に存在しない栗紀商店は、井川で暮らす人々にとって重要な生活の基盤となっている。

4日間栗紀商店にお世話になった上で石善ストアと見比べてみて、井川の住民にとって栗紀商店ともう一つの個人商店の身近さと重要さがよくわかった。店という形態を持って、それなりに大きな需要に応えられる存在は祀りや会合、その他、人が集う機会ごとに存在感を示すものだ。人がその土地に居続けるにはそこで生きていくだけの手段がなければ難しい。栗紀商店は井川に人が暮らす上で重要な役割を担っていて、特に一人暮らしのお年寄りといった方々にとって、ごく身近にあり時には家まで届けてくれる個人商店の存在はありがたいものだろう。2011年現在、たいがいのものを世帯内で自給できていた時代とは違うのだから、「なくなったら、困る」という地域住民の声は紛れもなく本物に違いない。かつて、徒歩で静岡の街と井川とを往復して人々の需要に応えていた「便利屋」は、ダムの建設と言う外からの影響で需要が増加したことによりその形を変えた。栗紀商店は物の売買だけでなく、井川の細かな要望を聞きどけられるようになった。いつでもそこにあり、いつでも必要な物を買えるという安心感を住民にもたらしただろう。もっともダム建設の為に交通の便がよくなったことで住民が外部で購入する機会も増えた。増えはしたがこれは全国に共通することで、短時間で大きく品ぞろえの良い店に行けるのならば足もそちらに向きやすい。早く安全な通販を簡単に利用できるなら、場合によってはそちらを利用する機会も増える。山間部の井川だからこそ、ここまで必要とされ続けているとも言える。商い一本で生計を立てている店は本村にしかなく、他の集落からは同じ井川でさえ歩きでは行きづらいのに、それが静岡市街ならなおさらだ。これからも井川がある限り、品揃えの良いか、「八百屋」としての個人店は必要とされるだろう。（袴田 恵美）

おわりに

私たちは流通という視点で井川を見てきた。井川は一見すると山に囲まれ孤立しているようにも見えるが、外部からの影響を確実に受けていることがわかった。

私たちはまず、井川で流通している商品と井川から流通している商品を見て、時代によって流通している物が変化していることに気付いた。農業や商業であれば、井川内と井川外の流通に乗るのは、以前は日持ちする商品が多かったが、現在は魚や肉類、野菜、傷みやすい果物なども井川で販売されているし、朝市会によって井川でとれた野菜も静岡で販売されるようになった。それは流通ルート・交通網の発達(たとえば冷凍冷蔵車の登場、コールドチェーンと呼ばれる低温流通機構の整備、大規模なトラック流通)により、大量の商品・傷みやすい商品を運べるようになったことが大きい(江原他　2009:318)。林業なら、国産材の低迷と、外材の輸入量の増大が挙げられる。その変化はグローバル化により、世界中との物のやり取りが生まれたことで起こったものであるといえるだろう。また輸入自由化の流れと捉えれば、戦後復興が背景にある、時代による変化ともいえるだろう。井川は確実に外からの影響を受けている。

井川の歴史は外部とのつながりによって形成されてきたといっても過言ではない。交通が発展したことで生まれた人の流れ・物の流れは、井川の盛衰の大きな要因である。

現在の井川に住む人々の暮らしを支えているのは紛れもなく「流通」なのである。物資の流れが途絶えることは、井川存続の不可能を意味する。井川にはいまだ多くの人が住み、それぞれが様々な理由で井川に生活している。その方々が安心して井川に住み続けられることが可能な未来を、私たちは考えていかなくてはならない。

参考文献

古家晴美　他
　2009　『日本の民俗　食と農』吉川弘文館
江原絢子　他
　2009　『日本食物史』吉川弘文館
曽根辰雄
　2004　『井川歴史ミニ案内　静岡市井川地域における歴史的展開に関する文化財的研究』
滝波明　他
　出版年不明　『筑波大学農林技術センター井川演習林の林業史-伐採記録と搬出痕跡について』
田中淳夫
　2007　『森林からのニッポン再生』平凡社
筑波大学教育修士地理学野外実験報告書作成委員会
　1995　『井川の歴史と暮らし』
野本寛一　他

1997　『講座　日本の民俗学　5 生業の民俗』雄山閣
森竹定弘
1912　『井川村誌』

参考資料

井川村・静岡ニュース社(編)
1958　『井川ダムの記録』

参考 HP

浜松市公式 HP
http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/ward/higashiku/detail.html　(2011/07/18 現在)